

# 異年齢保育の実態把握と今後の展望について

島 田 知 和

Research and future prospects on the multi aged child care

Tomokazu SHIMADA

## 【要 旨】

本研究では、異年齢保育の実態把握と先行研究より得られた異年齢保育の教育的意義について検証することを目的として、大分県内における保育所、幼稚園、認定こども園へ質問紙調査を行った。研究協力園の83%が異年齢保育を実施しており、また始めた要因として「異年齢保育に教育的な意義を感じたため」という回答が多く、今日の異年齢保育への関心の高さが示唆された。本研究では異年齢保育によって育つものとして、「年齢の差を生かした育ち」と「年齢の枠を越えた育ち」を仮説として、質問紙調査より得られた回答をもとに分析を行った。その結果、今日の乳幼児教育では年齢別保育が前提となっている傾向にあり、各年齢の発達を保障した上で、そこへ異年齢間による子ども同士の関わりで育まれやすい「年齢の差を生かした育ち」の「思いやり」や「憧れ」などを期待していることが示唆された。今後の展望として、本研究では支持されなかった「年齢の枠を越えた育ち」等が異年齢保育によって育まれるのか、子どもの観察記録や保育者へのインタビューを通して質的に検討していく必要性が示唆された。

## 【キーワード】

異年齢保育 統計的研究 教育的意義

## I. 問題と目的

近年、子どもの出生数は減少傾向にあり、厚生労働省人口動態統計によると、2019年の子どもの出生推計数は86万4000人となり、2016年以降、4年連続で100万人を割り込んでいる。子どもの出生数の減少から、きょうだいがいない子どもの増加、地域の子どもの同士の関わり希薄化などが問題視されており、こうした問題を

解消すべく、幼稚園や保育所、認定こども園等（以下、園）において、自分とは異なる多様な他者との関わりが求められている。

こうした多様な関わりを生み出す保育実践の一つとして異年齢保育が注目されている。異年齢保育について、秋田（2019）の保育学用語辞典では次のように説明されている。「異なる年齢の子どもたちで一つのクラスや活動を構成する保育形態。同一年齢でクラスを構成する年齢別保育（横割り保育）に対して、縦割り保育と

もいう。」とあり、年齢別保育と対照的な「保育形態」として異年齢保育が説明されている。

一言に異年齢保育といってもその実施形態は年齢別保育と比較して多様で、例えばクラス編成においても「3・4・5歳児」、「1・2・3・4・5」歳児、「4・5歳児」など、実施園によって様々である。これらの実施形態に加えて、宮里(2001)は、異年齢保育を始めたきっかけをもとに2つの類型に分類している。1つは異年齢保育に積極的な教育的な意義を求め、異年齢保育でクラス編成や活動を行う「理念的異年齢保育」と、もう1つは人口が少ない地域や過疎地のように子どもの数が少なく、年齢別ではクラス編成が難しいため、やむをえず異年齢でクラス編成や活動を行う「条件的異年齢保育」に分類している。このように異年齢保育を始めたきっかけや、異年齢保育に期待するものなどは、実施園により多様で、それぞれの園ごとに豊かな実践知が蓄積されている。ここで得られるものは、「異年齢保育で何が育つか」という異年齢保育の教育的意義を明らかにする上で大きな知見となると考える。

近年、異年齢保育に関する実践や研究は数多く報告されており、島田(2010)では、異年齢保育の教育的意義として、先行研究を概観しながら、以下の3点に要約した。第1に、子ども同士のタテ・ヨコの豊かなかかわりができることである。仲野・後藤(2002)でも異年齢児間の関わりによって、年齢の枠にとらわれずに誰でも気軽に声をかけられるようになることを明らかにし、お互いがあるのままを認め「共に生きる」ことの重要性について言及している。第2に、個々の子どもの拠点となる場所や居場所がひろがることである。第1の教育的意義にも共通するが、異年齢で生活することで年齢に関係なく、子どもたちが自由に他者との関わりを広げ、深められることも異年齢保育の魅力だと言える。第3に、多様な仲間関係と多面的な友人選択により、年長児には年少児へのいたわりと思いやり、さらにはリーダーシップを育て、年少児にはモデリングによる学習や年長児の言動が成長への手本となることである。

これらの教育的意義に加えて、島田(2016)では、異年齢保育実践の観察記録の分析によって、異年齢保育において何が育つのか検証した。観察を開始した4月初旬では4歳児と3歳児の関係は、衣服の着脱の手伝いや、泣いている3歳児に対して声をかけるなどの「世話する—世話される」関係、「教える—教えられる」関係が中心だったが、8月頃になると「砂場で水を流して遊ぶ」という同じ目的、イメージを共有しながら、年齢に関係なくお互いに自分たちの要求を出し合いながら遊ぶなどの「横並びの関係」が見られるようになった。

また島田(2018)では、年長児が異年齢保育による生活をする中で、年少児へ自分の思いをわかりやすく伝えるために工夫している姿が見られ、「年齢の差」があるからこそ生じやすい育ちがあるのではないかということが示唆された。

これらの先行研究をもとに本研究では異年齢保育の教育的意義を以下の2点に大別した。年長児、年少児間の「憧れる—憧れられる」関係、「世話する—世話される」関係、年齢差があるからこそ生じる葛藤や課題を乗り越える過程にある育ちなどの「年齢の差を生かした育ち」と、年齢という枠がなくなるからこそ育まれる多様な人間関係や子どもの居場所の広がり、年齢に関係なく自分たちの要求を出し合える横並びの関係などの「年齢の枠を越えた育ち」に大別されるのではないかと考える。

そこで本研究では、異年齢保育によって育つものとして「年齢の差を生かした育ち」と「年齢の枠を越えた育ち」を仮説とし、異年齢保育を実践している園が異年齢保育にどのような子どもの育ちを期待して実践しているのか、質問紙調査を用いて検証する。

また、質問紙調査から得られた回答をもとに、異年齢保育の現状と課題を把握し、統計的に分析していく。

## II. 方法

### 1. 調査方法、研究協力園、調査手続き

2020年9月より、大分県内の保育所、幼稚園、認定こども園479園へ質問紙調査を行い、有効回答数は303部、有効回答率は63%であった。

なお本調査では、研究の目的、調査から得られた情報を本研究以外では使用しないこと、個人情報取り扱いについては十分配慮することを研究依頼文へ明記した。回答は無記名で行い、園が特定されないように配慮した。分析は、SPSS ver. 27を用いて、クロス集計および $\chi^2$ 検定を行った。

### 2. 質問紙の構成

質問項目は研究協力園の属性（施設種、所在市町村、園児数）、園の教育・保育方針、異年齢保育の実施状況（異年齢保育を始めたきっかけ、期待する子どもの育ち、異年齢保育の課題）、園生活の1日の流れで構成されており、それぞれ選択式で回答する質問を設定した。なお、園の教育・保育方針に関する質問については、ベネッセ教育総合研究所（2019）が行った第3回幼児教育・保育についての基本調査を参照し、質問項目を作成した。

## III. 結果と考察

本研究では質問紙調査の結果から、異年齢保育の実施状況や、今後の展望について分析し、考察を行った。

### 1. 異年齢保育の実施状況

#### (1) 異年齢保育の実施状況の全体像

異年齢保育の実施状況について表1に示す。クラス編成から異年齢保育を実施している園が106園で35%、活動によって異年齢保育を部分的に実施している園が147園で48%であった。この結果から83%の園が異年齢保育を実施していることになり、異年齢保育への関心の高さがうかがえる。

表1. 異年齢保育の実施

実施している	35%
実施していない	17%
部分的に実施している	48%
実施していないが検討している	0%

「実施している」と回答した106園のクラス編成について表2に示す。

クラス編成は「3・4・5歳児」が36%と最も高く、続いて「4・5歳児」が24%であった。なお、複数回答があったものは「その他」としている。「3・4・5歳児」のクラス編成が最も高くなった要因として、後述もするが、異年齢保育の課題として、実践している多くの園が「年齢別の活動や発達の保障」「保育計画の作成」を回答している。2018年度の保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定（改訂）され、第2章保育の内容が、「乳児」「1歳以上3歳未満児」「3歳以上児」の年齢により区分された。子どもたちの活動や発達の保障と、異年齢保育を両立するクラス編成として保育内容が同じ区分である「3・4・5歳児」が取り入れられているのではないかと考える。

表2. 異年齢保育のクラス編成

3・4・5歳児	36%
2・3・4・5歳児	8%
1・2・3・4・5歳児	3%
3・4歳児	4%
4・5歳児	24%
その他	24%

#### (2) 施設種ごとの実施状況

次に保育所、幼稚園、認定こども園などの施設種ごとの異年齢保育の実施状況を表3に示す。

異年齢保育を「実施している」、「部分的に実施している」と回答した園は、保育所がともに45%、認定こども園が31%、60%と高い傾向が見られた。一方で幼稚園では実施していない割合として46%と、他の施設種と比較して高い傾

表3. 施設種ごとの異年齢保育の実施状況

	実施している		実施していない		部分的に実施している	
	園数	割合	園数	割合	園数	割合
保育所	57	45%	13	10%	56	44%
幼稚園	10	18%	26	46%	21	36%
認定こども園	39	32%	11	9%	70	58%

表4. 園の教育・保育方針と異年齢保育の実施状況

番号	項目	園数		割合		園数		割合	
		全体	実施している	実施していない	部分的に実施している	実施していない	部分的に実施している		
1	のびのびと遊ぶこと	119	39%	35	33%	20	40%	64	43%
2	基本的な生活習慣を身に付けること	140	46%	47	44%	18	36%	75	54%
3	文字や数を学習すること	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
4	自分らしく安心して生活できること	57	18%	24	22%	11	22%	22	14%
5	友だちを大事にし、仲良く協力すること	126	41%	35	33%	30	60%	61	41%
6	国際感覚を養い、外国語に親しむこと	4	1%	1	1%	1	2%	2	1%
7	考える力を養うこと	108	35%	40	37%	19	38%	49	33%
8	粘り強く挑戦すること	28	9%	7	6%	5	10%	16	10%
9	豊かな情操や感性を育むこと	110	36%	41	38%	17	34%	52	34%
10	人への思いやりをもつこと	106	34%	41	38%	14	28%	51	34%
11	礼儀作法を身に付けること	3	1%	2	2%	1	2%	0	0%
12	遊びの中でいろいろなものに興味を持つこと	97	32%	41	39%	11	22%	45	30%

※当てはまるものを3つ回答（複数回答）

向が見られた。この結果の要因として、2018年改定（改訂）の保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領から分析すると、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には異年齢保育の指導計画の作成に関して次のように記載されている。「異年齢で構成される組やグループでの保育においては、一人一人の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう配慮すること。」とあり、保育所、認定こども園では、乳児から生活していることから異年齢間の関わりが増え、保育計画においてこのような配慮が求められている。子どもの年齢の幅が大きいことも異年齢保育の実施に影響を与えていると考えられる。

また大分県内の公立幼稚園が年長児クラスのみ園が多く本質問紙調査では、生活している子どもの年齢の幅を尋ねていなかった。今後、

施設種ごとの実施状況を調査する際の検討課題となる。

## 2. 異年齢保育の教育的意義

### (1) 教育・保育方針

研究協力園の教育・保育方針と異年齢保育の実施状況について表4に示す。

研究協力園全体において回答割合が高い項目として、「基本的な生活習慣を身につけること」が46%、「友だちを大事にし、仲良く協力すること」が41%、「のびのび遊ぶこと」が39%という結果となった。

さらに異年齢保育を実施している園と実施していない園において、項目ごとにカイ二乗検定を行ったところ、「友だちを大事にし、仲良く協力すること」にのみ1%水準で有意差がみられた。 $(\chi^2 = 10.176, df = 1, p = .001)$  年齢差がある異年齢保育では、遊びや生活の中で課題

表5. 異年齢保育を始めた要因

番号	項目	園数	割合
1	異年齢保育に教育的な意義を感じたため	148	59%
2	少子化等により年齢別の編成が難しくなったため	36	14%
3	保育者間の連携や職員配置の改善のため	34	13%
4	保護者からの要望があったため	1	0%
5	その他	34	13%

表6. 異年齢保育に期待する子どもの育ち

番号	項目	園数	割合
1	他者への思いやり	167	66%
2	憧れからの挑戦や模倣	176	70%
3	多様性を認め合う仲間関係の形成	125	49%
4	異年齢間による葛藤やつまずき	13	5%
5	年齢に関係なくありのままの自分を表現すること	29	11%
6	年齢を越えた対等な関係による協同性	36	14%
7	異年齢間で受け入れられる安心感・自信	72	28%
8	教える—教えてもらう体験	127	49%
9	その他	5	2%

※当てはまるものを3つ回答（複数回答）

や葛藤、困難さが生じやすい。そのため、友だちと共通の目的に向かって、試行錯誤しながら協力していくためには、より深い対話が求められる。ここに「年齢の差を生かした育ち」があるとした仮説は支持されなかった。また、「人への思いやりをもつこと」では異年齢保育の実施状況において有意差はみられなかった。 $(\chi^2 = 1.697, df=1, p=0.193)$

## (2) 異年齢保育を始めた要因

異年齢保育を始めた要因について表5に示す。

「異年齢保育に教育的な意義を感じたため」と回答した割合が59%と最も高かった。これは宮里（2001）がいう「理想的異年齢保育」として実施している園であり、より積極的に異年齢保育の教育的な意義や効果を期待して、実践している園が多いことを示している。一方で「条件的異年齢保育」として始めた「少子化等により年齢別の編成が難しくなったため」と回答した園は14%であった。

## (3) 異年齢保育に期待する子どもの育ち

異年齢保育に期待する子どもの育ちについて表6に示す。この質問項目は先行研究によって示唆された異年齢保育の教育的な意義をもとに作成しており、仮説とした「年齢の差を生かした育ち」と「年齢の枠を越えた育ち」について検証する。

異年齢保育を実施している、部分的に実施している253園の中で、59%の園が「異年齢保育に教育的な意義を感じたため」と回答している。異年齢保育に期待する子どもの育ちとして「憧れからの挑戦や模倣」の70%、「他者への思いやり」の66%、「教える—教えてもらう体験」、「多様性を認め合う仲間関係の形成」の49%の順で高い結果が得られた。一方で回答の割合が低かった項目として「年齢に関係なくありのままの自分を表現すること」「年齢を越えた対等な関係による協同性」「異年齢間による葛藤やつまずき」があげられ、多様な仲間関係の形成以外の「年齢の枠を越えた育ち」は支持されなかった。

表7. 異年齢保育における課題

番号	項目	園数	割合
1	年齢別の活動や発達の保障	168	66%
2	同年齢間による競い合いなどの不足	69	27%
3	年少児の年長児への依存的傾向	21	8%
4	年長児から年少児への威圧的傾向	22	8%
5	異年齢児間の遠慮や萎縮	34	13%
6	保育計画の作成	150	59%
7	保育者間の情報共有	90	35%
8	保護者からの理解	39	15%
9	その他	33	13%

※当てはまるものを3つ回答（複数回答）

これらの結果から、異年齢保育の教育的意義の傾向として「年齢の差を生かした育ち」の憧れや模倣、思いやりがより支持されていることが明らかとなった。

### 3. 異年齢保育の課題

異年齢保育を実施している園、部分的に実施している園253園の異年齢保育を実施する上で課題と感じている項目を表7に示す。「年齢別の活動や発達の保障」が66%、「保育計画の作成」が59%と高かった。

子ども一人ひとりの発達において、より多様性のある異年齢保育では、それぞれの年齢や発達段階に応じた活動や保育計画を作成するなど異年齢保育と年齢別の発達の保障の両立に課題を感じている園が多い結果となった。

一方で「年少児の年長児への依存的傾向」「年長児から年少児への威圧的傾向」「異年齢児間の遠慮や萎縮」などの子ども同士の関係性に関する項目は割合が低い結果となった。

## IV. 総合考察

本研究では、大分県内における保育所、幼稚園、認定こども園へ質問紙調査を行うことで、異年齢保育の実態把握と先行研究より得られた異年齢保育の教育的意義について検証することを試みた。

異年齢保育をクラス編成から実施している園と好きな遊びの時間など、部分的に実施してい

る園と合わせ研究協力園の83%が異年齢保育を実施していることが明らかとなった。また異年齢保育を始めたきっかけとして多くの園が「異年齢保育に教育的な意義を感じたため」と回答しており、今日の異年齢保育への関心の高さが明らかとなった。

また、異年齢保育における課題として、年齢別の発達や活動の保障、保育計画の作成など異年齢保育と各年齢の発達との両立に困難さを感じていることが示唆された。今日の幼児教育ではやはり年齢別保育が前提となっており、年齢ごとの発達を保障した上で、異年齢間による子ども同士の関わりで生まれやすい「年齢の差を生かした育ち」である「思いやり」や「憧れ」などを期待していることが窺える。

一方で本研究において「年齢の差を生かした育ち」として仮説した「年齢差から生じる葛藤や課題を乗り越える過程にある育ち」は支持されなかった。「友だちを大事にし、仲良く協力すること」を教育・保育方針としている園では、異年齢保育を実施していない園が多く、やはり同年齢による比較的発達差が小さい関係の方が、子どもたちが協力していく上で、お互いの要求を出し合い、受け止め合いやすく、保育者の援助や環境構成も行いやすいことが結果の要因として考えられる。

これらの分析結果と、異年齢保育を「部分的に実施している」園が多かったことから、子ども一人ひとりの発達を保障していくことと、異年齢保育に期待される育ちを両立していくた

めには、保育を計画する際に、そのねらいや活動に応じた「保育形態」として「異年齢保育」と「年齢別保育」を柔軟に選択していくことも異年齢保育の実践において重要な視点だということが明らかとなった。

今後の展望として、本研究では支持されなかった「年齢の枠を越えた育ち」や年齢差によって生じる課題や困難さが持つ教育的意義について引き続き検討していく。異年齢保育を実施している園、または部分的に実施している園における、子どもの観察記録に基づく分析や、保育者へのインタビューを通して質的に分析・考察を行いたい。

### 引用文献

- 1) 秋田喜代美 (2019) 保育学用語辞典, 中央法規

### 参考文献

- 1) ベネッセ教育総合研究所 (2018) 第3回幼児教育・保育についての基本調査
- 2) 伊藤シゲ子 (2018) 保育内容「人間関係」に関する考察—乳児から5歳児まで一緒に暮らす中での育つ力 人として生きる力を考える—, 日本福祉大学子ども発達学論集 第10号 pp.167-173
- 3) 菅田貴子 (2008) 異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究, 弘前大学教育学部紀要 第100号 pp.69-73
- 4) 宮里六郎 (2001) 異年齢保育実践の課題と「保育計画」づくり, 季刊保育問題研究 第190号 pp.86-101
- 5) 仲野悦子・後藤永子 (2002) 異年齢児とのかかわり—いたわりとおもいやりの心の育ち—, 保育学研究 第40巻 第2号 pp.72-80
- 6) 島田知和 (2010) 異年齢保育に関する先行研究の概観, 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要 No. 28 pp.119-126
- 7) 島田知和 (2016) 異年齢保育における社会性の発達に関する一考察, 別府大学短期大学部紀要 No. 35 pp.67-77
- 8) 島田知和 (2018) 異年齢保育における社会情動的スキル育成に関する一考察, 日本保育学会九州地区第3回研究集会

### 謝辞

本研究は2020年度別府大学短期大学部学長裁量経費 (R2短22) により質問紙調査を行うことができました。感謝申し上げます。

本研究にご協力いただきました大分県内の保育所、幼稚園、認定こども園などの乳幼児保育施設の先生方へ感謝申し上げます。